

(授業報告ノート)

「大学におけるアナウンス系授業の役割と方向性—『アナウンス入門』を例にして」

文学部日本語日本文化学科講師 原 良枝

1 はじめに

全国の大学の中でアナウンサーを目指せる大学・短期大学の数は、「スタディサプリ」の検索によると45をカウントした。甲南女子大学の名前も当然挙がっている。しかし、芸術系の大学以外で本校のようにコースとして設定され、アナウンスブースや放送局さながらのスタジオを有し、カリキュラムを組んでいる学部となると（残念ながら全てを調べることはできないが）そう多くはないはずだ。

甲南女子大学文学部日本語日本文化学科視聴覚コミュニケーションコースにおいて、「アナウンス入門」から、「視聴覚コミュニケーション演習Ⅰ、Ⅱ」、「視聴覚コミュニケーション実習Ⅰ、Ⅱ」とステップアップしていく授業（以下、これらを「アナウンス系授業」と称する）は充分特徴的である。アナウンサーやキャスター、レポーターという声の職業に興味関心があり、それらの職業を目指す学生が履修する。

しかし、アナウンス系の授業は、アナウンサーを目指す学生だけを対象にしているのではない。アナウンスという行為は、音声言語で事実や状況を正確に伝えることを意味する。人前で話をすることはもちろんのこと、駅や病院、行政などでの案内アナウンス、教師に限らず営業職でも接客でも、その他サービス業でも、アナウンスは常に行われている。我々が社会生活を送る上で「話し言葉」として他者とコミュニケーションをとる上で欠かせない行為である。

アナウンス系の授業は、これまで小・中・高等学校の教育ではほとんど行われてこなかった「話し言葉」の実践授業である。特に「アナウンス入門」は、音声言語表現技術を論理的、実践的に学習する土台を築く重要な授業である。本稿では、「アナウンス入門」の授業としての位置づけ、内容、学生の変容、課題について授業の報告ノートとして述べていく。

2 「アナウンス入門」の授業としての位置づけ

アナウンス系の授業とは、双方向性で積極的に声を出して参加する授業である。声は身体そのものである。スポーツの授業で身体を動かすように、アナウンスの授業では声を出すことを課している²。

とはいえ、声を出すこと自体が目的ではない。声は自己と他者をつなぐメディアの一つである事を認識し、メディアとしての声の特性を理解した上で、その声を使い他者に何かを伝えるための基礎的な手立てを習得することを目指す。「アナウンス入門」の授業では、①日常生活では意識しない声（話者自身の声と、他者の声）と、その声が含まれている様々な情報の存在への気づきを促すこと。②まとまった話を人前ですることに

慣れるよう場を与えること。この2点に主眼を置いている。それぞれについて述べていこう。

多くの人は風邪をひいて声がかすれるような事が無い限り、日常生活において声を意識することはほとんどないであろう。また、話されている内容に意識を傾けていても実は内容を伝えている声が発している情報を耳が捉えていることを忘れている。声は文字情報では伝えきれない微妙な感情のブレやズレなどをダイレクトに表現している。このような音声情報への気づきを、イントネーション、プロミネンスといった音声言語表現技術に即して整理をしていくことで理解を促していく。

例えば、文字で前後の文脈を考えず「雨」と表記したとする。音声では1拍の言葉でも尻上がりにすれば「雨[↑]」という疑問形になり「雨ですか？雨が降っていますか？」の意味を付与する。この疑問形に対して「雨[↓]」と尻下がりに答えれば「雨です」という肯定だけでなく「(残念ながら)雨ですね」というニュアンスを伝えることもできる。また、「雨！」と強く言うことで、「(何回も聞かないで)雨と知っているでしょう」というようなその前に行われた会話のあり様を推察できる情報さえ含んでいる。実際の会話では「雨？」の問いに対する返答の時間の長短や返答の有無によって場の状況や人間関係まで伝えることもできるのだ。

声の情報は言い方としてのイントネーションやプロミネンスに込められたものに限らない。声の強弱や音質の微妙な変化が、話者の心身の状況をありのままに反映する。視覚優位の世界に生きている現代人だからこそ、素直に心身をリフレクトする声に対して意識を向けることはコミュニケーションを行う上でも重要なことなのである。

身近な例を挙げれば、学生達は意識せずとも文字情報と音声情報の境界を工夫しながらやりとりをしている。ラインやメールといった文字情報に絵文字やスタンプを加えることで情報を補っている。この絵文字やスタンプが声の情報の一部なのだ。文字だけでは伝わらない気持ちや状況を絵文字やスタンプで補強している。このことに気づけば、声の情報という考え方を理解するのは容易である。文字が表わしている情報を聞き手を意識して音声化する際に、絵文字やスタンプに相当するものが読み手としての自分自身の声である。したがって、声に情報を含ませるような読み方をすることが必要であると理解できるようになる。これがアナウンスをするということの基本的な考え方である。

次に、人前で話をすることに慣れるための場を提供するという視点であるが、アナウンスも声を使う身体表現であることからスポーツと同じように練習と慣れを必要とする。人前という場合、マイクに向かって話す際には目の前に人はいないから人前ではないということにはならない。この場合も不特定多数の人前になる。目の前に人の姿があるがなかろうが、他者に対して話をすることは人前である。狭義では、プライベートにおけるお喋りも含まれよう。(実際に、ある意味ではプライベートなお喋りほど難しいものはないかもしれない)しかし、授業で意味する人前は、パブリックなシチュエー

ションを想定している。

教室では、教師と学生の見ている光景は異なっている。1対多という状況で教壇を眺めている学生が、教壇に立つと目に入る教室の景色は一変する。人前に立つとは、多くの人から視線を一斉に浴びることだ。何かの会の代表や演劇などを経験している学生は慣れているかも知れないが、多くの学生にとって（知らない人たちから）一斉に見られる場に立つことはさほど多くはない。『スピーチの順番が回ってきたが、一体何をどう話せば良いのだろうか。』と思いつつも学生たちは、分からない状態でまずは1分ほどのスピーチを終わらせる。中には、言葉が続かず途中で泣き出す学生もいる³。

「前に立つと緊張して頭が真っ白になった。」「ひざがふるえてドキドキした。」という初回の感想から、回を重ねるうちに「どういう表情をすれば良いのか。」「どこを見れば良いのか。」「手はどうすればよいのか。」「話の構成の仕方は?」「話し方は?」という具体的な質問に変わってくる。そして多くの学生が15回の授業が終了する頃には、堂々とした態度でスピーチができるようになる。当然のことながら、申し分のないスピーチができるというレベルに達する訳ではないが、人前に立つことに慣れることでスピーチそのものに集中できるようになる。アナウンスの授業においてスピーチを課す目的は、人前に立つことの特殊性に慣れ、恥ずかしさと怖さを払拭することにある。

3 「アナウンス入門」で伝えていること

3-1 声の意識化

では、声を意識するにはどのようにすれば良いのか。呼吸法、発声・滑舌練習は声を出すためのウォーミングアップとして毎時必ず行うプログラムであり、まず姿勢を整えることから指導を行う。次に、音声言語表現に関する知識を授業時ごとにワンテーマを設定し、反復しながら積み重ねていく方法をとった。具体的には、「アクセント」、「イントネーション」、「プロミネンス」、「ポーズ（間）」、「句読」、「鼻濁音」等を取り上げた。簡単な例文を提示し丁寧に読む。入門であるため、音声言語表現技術を習得することより、音声言語表現技術とはどのような技術を指すのか、その概要を紹介することに主眼をおいている。実際の技術指導は演習や実習段階で深めていく。しかし、「アクセント」「イントネーション」「プロミネンス」「ポーズ」の4項目については、基本的なことであるためすぐに応用ができるよう繰り返し指摘を続けた。

例文としては、天気予報、ニュース、CM原稿、告知・おしらせ原稿、詩、ナレーション、スピーチ原稿、幼年向け童話等、様々な文章に触れながら表現の工夫を試みた。文章の読みは一通りではない。一つの文章でも様々な読み方ができるが、まずはジャンルの違う文章にふれながら読み方の違いを確認し、次に音声化するに当たり準備が必要であることを伝えた。例を挙げながら、学生の取り組みの様子を加えて述べていこう。

【天気予報】

今日は全国的に晴れる所が多いでしょう。

気温は
昨日より高く、
特に
東海から西では
20度前後まで上がって
小春日和となりそうです。

ただ、
北海道と関東では
雲が広がりやすく、
一時的に
にわか雨があるでしょう。
折りたたみの傘があると安心です。

上記の天気予報原稿のように、配布する文章は目で見て読みやすいように分ち書きにして提示している。ニュースや天気予報はリズムがあり、比較的読みやすい。(以下、本稿では分ち書きにせず記載する)アクセントを忠実に発音し、原稿で行が開いているところはポーズをとる。文章の中で一番伝えたいことを的確につかみながら、その点を伝えるためにはどうすれば良いかを考えさせる。

【ニュース】

中国の習近平^{シーチンピン}国家主席と米国のペンス副大統領が、17日、アジア太平洋経済協力会議(APEC)首脳会議の開催地パプアニューギニアで相次いで演説し、貿易紛争や互いの地域構想を踏まえ応酬を繰り返しました。決定的な対立は避けたい中国に対して、アメリカは対決姿勢を強めており、両大国の攻防が続いています。

2018年後期の授業で読んだニュース原稿である。このニュース原稿を単に音声化することは容易い。しかし、短いニュース原稿であっても背景にあることを調べ、理解していかななくてはならない。読むための準備を続けることで時事問題への苦手意識払拭されていくはずである。このニュースでは、中国の国家主席の読み方は当然常識として押さえておくべきだ。世界地図を広げ「パプアニューギニア」の地理的位置を確認し、APECについての概要を調べることも必至である。また、「ニューギニア」と「パプア

ニューギニア」のアクセントの違い⁴を伝えると、学生は興味を抱いていた。一つのニュースから限りなく世界は広がっていく。

【ナレーション】

「家に明かりがほしい。夜も勉強ができるから」

アフリカ東部ウガンダの難民居住区に保護されている少年はそんな望みを口にしました。14歳。内戦が続く南スーダンから逃れてきました。南スーダンでは、2013年に内線が始まって以来、周辺国に逃れる人が急増しています。難民の6割は子どもで、孤児になるケースがあとを絶ちません。家族を目の前で虐殺されたトラウマや、避難生活によるストレスを抱えている孤児にとって、専門的なケアが必要ですが、専門家の対応が追いつかないのが現状です。

授業で使用した実際の実稿には涙を浮かべた少年の写真を載せ、イメージを膨らませるようにした。学生たちにはウガンダの地理的な位置を確認させ、難民問題などについては簡単な解説を加えた。さらに日本での難民に対する政府の基本的考え方や労働問題などと抱き合わせて調べ理解していくことで知らずうちに知識は広がっていくことを伝えた。

ナレーションは、誰の視点で書かれているのかを考えることが大切である。この文章では、「家に明かりがほしい。夜も勉強ができるから」という14歳の少年のセリフから始まっている。このセリフをどのような読み方をするかによって全体のトーンが決まってくる。「アナウンス入門」の例文としてはやや高度であったかもしれない。(同じ文章の分量を増やし、「視聴覚コミュニケーション演習Ⅰ」と「実習Ⅰ」で取り上げたところ、表現力は入門の学生たちと比較して上がっている事が確認できた。) 内容について調べる習慣が当たり前のようについてくれば、時事問題への関心と読み取る力は自ずと伸びると思われる。

【CM】

本場の宇治茶を召し上がりませんか。吟味を重ねた希少な宇治茶のみで仕立てた色味ともに濃厚で健康に良い深蒸し茶。今なら、特別価格、プレゼント付きでご案内します。ご注文はこちら 0120-44-0950 まで。本日は夜 10 時まで受け付けています。

CM 原稿は、短文でも難度の高い文章である。プロミネンスを駆使して情報を正確に印象づけて読まなくてはならない。イメージはできてもほとんどの学生は表現できない。次に挙げる「詩」と同様に恥ずかしさが勝ってしまう。皆の前で詩を朗読するという朗読文化がない国民性ゆえかもしれない。(現代詩の中には目で読むことをテーマにしている詩があるが、そのような詩を除いて) 詩は、声に出して読むことで詩の味わいや心

へ訴えかける力が突き抜ける。恥ずかしさを払拭して言葉の力をくみ取るには CM 原稿と詩は最適なテキストとなる。

【詩】① 2018 年前期

「自分の感受性くらい」	茨木のり子
ばさばさに乾いてゆく心を	
ひとのせいにはするな	
みずから水やりを怠っておいて	
気難かしくなってきたのを	
友人のせいにはするな	
しなやかさを失ったのはどちらなのか	
苛立つのを	
近親のせいにはするな	
なにもかも下手だったのはわたくし	
初心消えかかるのを	
暮らしのせいにはするな	
そもそもが ひよわな志にすぎなかった	
駄目なことの一切を	
時代のせいにはするな	
わずかに残る 尊厳の放棄	
自分の感受性くらい	
自分で守れ	
ばかものよ	
	(茨木のり子「おんなのことば」より 童話屋)

【詩】② 2018 年後期

「朝のリレー」	谷川俊太郎
カムチャッカの若者が	
きりんの夢を見ているとき	
メキシコの娘は	

朝もやの中でバスを待っている
ニューヨークの少女が
ほほえみながら寝がえりをうつとき
ローマの少年は
柱頭を染める朝陽にウインクする
この地球では
いつもどこかで朝がはじまっている
ぼくらは朝をリレーするのだ
経度から経度へと
そうしていれば交換で地球を守る
眠る前のひととき耳をすますと
どこか遠くで目覚時計のベルが鳴ってる
それはあなたの送った朝を
誰かがしっかりと受けとめた証拠なのだ

(谷川俊太郎「谷川俊太郎詩集 続」より 思潮社)

「自分の感受性くらい」については、「心にぐさっときた」「暗唱したい」という感想が目立った。特に「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」という最後の連を多くの学生が工夫しながら力を込めて表現をしていた。共感の度合いが高かったと思われる。

一方、「朝のリレー」は、コーヒーのCMで採用されていたことから知っていると言った学生が数人いた。爽やかな朝の風景を世界の点でつなぐイメージしやすい詩である。前半から後半をどのようにペースを変えて「それはあなたの送った朝を～」へたたみこんでいくのが求められる。最終試験の課題としたが、読み込んでくる学生と、そうでない学生との差が如実に表れた。

詩とは、自らを励まし力を与えてくれる存在になり得るものである。好き詩を見つけ数編を暗唱することを勧めた。

【スピーチ】「キング牧師の演説」より

友よ、今日私は皆さんに言っておきたい。われわれは今日も明日も困難に直面するが、それでも私には夢がある。それは、アメリカの夢に深く根ざした夢である。私には夢がある。(中略) 私には夢がある。それは、いつの日か、あらゆる谷が高められ、あらゆる丘と山は低められ、でこぼこした所は平らにならされ、曲がった道がまっすぐにされ、そして神の栄光が啓示され、生きとし生けるものがその栄光を共に見ることになるという夢である。これがわれわれの希望である。この信念を抱いて、私は南部へ戻って行く。

1963年、ワシントンDCでのデモ行進の際に行われたマーティン・ルーサー・キング・ジュニアによる「私には夢がある」の演説の一節である。スピーチの上達には、名スピーチを多く聞くことが欠かせない。しかし、日本の場合、名スピーチというものなかなか身近に存在しない。学生にとっては、AKB48の総選挙スピーチが一番イメージしやすいようだ。

名スピーチを聞き、そしてそのスピーチを自らがスピーカーとなり話すように読むことでスピーチ力は向上していく。実際、構成の仕方や聞き手の巻き込み方等をコピーすることで身体が覚えていくからである。ここにあげた部分は長いスピーチからの極短い一節だが、状況を思い浮かべながらキング牧師になりきって表現するように課したところ、前述の詩よりも声高らかに話す学生がかなりの数に上った。学生たちは「気持ち良かった」、「言葉がスラスラでてきて、話しやすい原稿だった」と笑顔で語っていた。名スピーチのコピーを行う機会を多く確保したいと考えている。

以上挙げた文章は授業で使用した例文の一例であるが、ニュースや天気予報原稿はその時々状況を捉えたものを新聞やテレビニュースから選び、随時作成している。その他の文章においては教室の雰囲気や考慮して素材を探すことにしている。「アナウンス入門」では、一つの長い文章を通して読むことは行わないが、2017年度後期は「江戸しぐさ」の一文を繰り返し読み続けた。「アナウンス入門」において、一つの文章を読みこなす方法と、様々な文章を提示していくやり方のどちらが適しているのかについては答えが見いだせない。履修学生の教室の雰囲気や人数にも関係してくるであろう。2017年度後期は、履修者が7名と少なかった上、そのうちの3名が韓国からの留学生であったため、一つの文章を徹底的に読みこなすことにした。

3-2 人前で話をすることに慣れるための場を提供する

「アナウンス入門」の授業は、発声・滑舌練習、読み、話す（書く）・聞くという流れの構成をしている。声の意識化は前半で行い、授業の後半は「話す（書く）」ことの実践としてスピーチを課している。スピーチを行う際には、必ず原稿を書いて準備をするように指示をしている。はじめは全文原稿を書き、練習を行う。話しやすいように構成を変え、言葉を精査する作業を経て、理想としては録音をして自分の話し方をチェックする。慣れてくれば、全文原稿から項目を取り出し、項目のみで話ができるようになる。

ここで重要になってくるのが、聞き手の存在だ。聞き手を考えて読み、話すことを心がける。決して独りよがりの読みや話にならないよう声のあり方や読み方、話しの構成の仕方考えることがアナウンスメントの要諦であることを伝えている。教室では「アナウンス入門」の場合（2017年度後期を除き）30名近い人数の前で話すことになり、随時スピーチ後には数名からそのスピーチについての感想を聞いている。教師の指摘は重いかも知れないが、同じ学生からの指摘に対しては素直に聞き入れる様子が窺える。

指摘する側もされる側も緊張をする。特に、指摘する側はいい加減にスピーチを聞くことはできず、感想を述べる際は言葉を選ばなくてはならないため、聞く態度と発表態度が鍛えられる。

ここでの指摘とは、スピーチ内容とパフォーマンスに対する感想や意見、質問である。良かった点を述べるのは容易いが、工夫する点を述べる際には遠慮や、自分ができないのに指摘などできないという気持ちが相まって口が重くなる。条件は皆同じである点を確認させた上で発言を求めている。スピーチを行うことと同様に、感想や意見を述べることも共にパブリックスピーキングにおいて重要である。今まで述べてきた人前で話することに慣れるための場の提供とは、スピーチに慣れる事だけではなく、意見や感想の述べ方にも慣れることを意図している。

「アナウンス入門」でのスピーチの課題は、「自己紹介」、「自分の好きなものごとをわかりやすく伝える」、「最近の気になるニュースについて」、「言葉について思うこと」等である。2017年度後期は履修者が7名であったため「日本文化の紹介」、「韓国文化の紹介」や「日本の若者」、「韓国の若者」についての発表も行った。また、2018年度後期の13回目の授業では、準備せずに「1分間自己紹介」（時間を正確に計りながら60秒を目指した）を行ったが、見事に60秒に収めた学生もおり、初回の自己紹介と比較して成長の跡がみられた。

4 学生の変容

4-1 リアクションペーパーから

アナウンスの授業とは一体何をする授業なのか、予想がつかないためか初めて授業に臨む学生の表情は固い。緊張していると筋肉がこわばり声もでないので簡単なストレッチを行い教室の空気を暖め、全員参加型の授業であることを確認する。発声や滑舌練習も未経験の学生がほとんどであるため物珍しさも伴いだらだら行う学生はいない。

リアクションペーパーに記された初回の感想は、「緊張した。」、「口が疲れた。」、「姿勢を保つのが大変だった。」、「声が続かない。」、「人見知りで、人前で話すのが苦手だが、授業についていけるか心配だ。」、「話すときに気をつけることを知りたい。」等である。発声と姿勢は緊密な関係にあるので、姿勢を保てないと声は続かない。初回の簡単な自己紹介では、立ち姿が崩れている点をまず指摘していく。「口が疲れた」のは、しっかり口を開けたことの証左なので参加度が高いことになる。人前で話すのが苦手だから「アナウンス入門」を履修したという学生が多い。ここでは、苦手なのではなくそのような機会がなかっただけのことであるという点を必ず伝えている。

回が進むにつれて「スピーチがドキドキする。」、「どこを見て話せば良いのか分からない。」、「声をだすと身体が暑くなる。」、「ポーズをとるのが怖い。」、「サ行とナ行がうまく出ない。」、「人のスピーチを聞くことでいいところを真似できるようになった。」

「もっと上手く話せるようになりたい。」というように具体的な感想が多くなる。

スピーチでは皆ドキドキする。集中力が高まるため、むしろ少しドキドキした方が良いこともある。しかし極度の緊張によりドキドキして膝が震えてしまい言葉を失うようではスピーチにならない。そのようにならないために、事前に入念な準備をして原稿を用意するのだ。おそらく多くの学生は原稿を書いて読み直す事はあっても、声に出して練習してこないだろう。スポーツも楽器も練習をしないことには上達しないのだが、スピーチについては練習をする習慣がない。練習をしなくてもなんとか格好はついてしまうからだ。

「どこを見て話せばよいのか」という質問に対しては、目の配り方と身体の入れ方を実践しながら解説を加える。「ポーズ（間）をとるのが怖い」とは、黙ることへの怖さである。読みにおいて活字の句読点に当たるのがポーズである。特に朗読はポーズの芸術といわれるほど、ポーズは重要である。センスの良し悪しが現れる。しかし、「アナウンス入門」ではポーズという技術があり、高度なテクニックであることを理解できれば良いと考える。

「サ行とナ行がうまく出ない」というように具体的に出不くい音に気づくことは大きな進歩だ。それだけ声を意識できていると言うことに繋がる。それぞれの行における補強滑舌練習を繰り返し、舌の動きや口の開け具合を解説し、基本となる母音の美しい発声を見直すよう指導している。

「人のスピーチを聞くことで良い点を真似できるようになった」ことは評価できる。良い所を真似するよう促している。聞いたスピーチのどこが良かったのか、なぜ良いと感じたのか、どういうことをすればそのようにできるのか、についてそれぞれ自分で考えていかなければならない。回が進むにつれて多くの学生たちは「もっと上手く話せるようになりたい」と思うようになる。頭が真っ白になることを経験しそれでも徐々に慣れて話ができるようになってくると、さらに上手くなりたいと欲が出てくる。このように思えるようになれば加速をつけて成長していく。

そして、最終回「ホーが 20 秒続くようになった。」、「最初の頃と比べるとスピーチで上がらなくなった。」、「みんなスピーチがすごく上手くなった。」という感想に変わっていく。「ホーが 20 秒続いた」という意味は、ホーといいながら息を吐くタイムのことだ。呼吸のこつは軽く吸って長く吐くことである。毎回タイムが伸びていくことに達成感が感じられたのであろう。20代の若い女性としては、25秒くらいは続いてほしいところではある。スピーチに関して、「みんなすごく上手くなった」と互いに評しあっている。皆が話し手になり、聞き手になっていくので、それぞれの成長は皆の成長として捉えられ、皆の成長は自分の成長の手応えとなり返ってくる。スピーチに慣れたということである。

4-2 教室環境について

どの授業においても構成人員が変われば教室の雰囲気も違うものになる。加えて教室の環境によってもその空気は変わってくる。2017年度の前期は、挿り鉢状の小ホールのような教室であったため、30名を一人一人通路側に着席するよう指示をした⁵。広い教室で教壇からの距離も遠く、隣の学生との物理的距離もあった。発表会や講演などには適しているが、少人数で動作や表情を細かく見る必要のある授業には適さない教室である。2017年後期は人数が少なかったため、アナウンスブースで同じ内容の授業を行った。2018年は前期（30名）、後期（24名）は共に音楽教室で行うことになった。広い教室ではあるが、教壇との距離は近く、椅子移動ができるため隣の学生との距離も保たれ、「アナウンス入門」に適する教室として環境は整った。

通常の授業以上にアナウンスの授業は環境に左右される。それは、人と人の接触だからだ。近すぎても遠すぎても上手くいかない。適度な距離が必要である。俳優・声優やアナウンサーなどを明確に目指している学生対象の専門学校やそれに特化した学部であれば逆にことさら環境云々を求めない。しかし、「アナウンス入門」の授業はプロを目指す学生だけではなく「人前で話すのが苦手だから少しでもうまく話せるようになりたい」という思いを抱いている学生の方が圧倒的に多い。授業を通してその苦手意識を払拭し、人前で話すことや文章を読むことの楽しさを体得して欲しいと願う。だからこそ、環境を整える事が必要なのである。通常の教室では、発声練習や滑舌練習で存分に声を出せないこともある。しかし、2017年度の小講堂のような教室では発声練習は存分にできても、入門としての細かい読みの指導には向かない。人と人との接触が薄くなってしまふからだ。幸い2018年度に使用した音楽教室は反響もあり現時点では「アナウンス入門」の授業に適しており安心している。

アナウンスの授業においてマイクは使用しない。学生にも使用させないようにしている。声の意識化で求めることは機械的に加工された声や増幅された声ではないからだ。2017年前期の教室で、学生たちは後方にも届くように声を余儀なくされた。おかげで授業後半では多くの学生の声は強くなっていったという利点もあったが一人一人がゲストのようで、全体的に散漫であることは拭えなかった。散漫ではあったが、2017年度前期の授業時のスピーチでは予期しないある連鎖がおこった。

4-3 スピーチ内容の連鎖

スピーチのテーマは前述したとおりまず、「自己紹介」からである。とりたてて項目を指示せず、好きなように3分以内で話をまとめる課題を出した。趣味や自分の性格、家族構成、通学時間、高校での部活動、好きなアイドルや宝塚のスターなどたどたどしくも自分の言葉を探しながら話をしていく姿には好感が持てる。放送部や演劇部出身者等6~7人は声も通り堂々たるスピーチであったが、大半の学生は声が小さく、遠慮が

ちなスピーチになる。吃音の学生⁶もおり、全体のレベルとしてどこを目指せばよいのかとらえきれないほどさまざまな学生たちが集まった教室であった。

自己紹介が一通り終わり 2 回目のスピーチの時、テーマは「心に残っている言葉、あるいは人物」であった。ある学生が、なぜ自分が今この大学にいるのかについて話を始めた。それは挫折の連続で心が負けてしまいそうになったという。それでも前を向いてこの大学へ入学でき良かったと思っているが、今でも傷は癒えていないという内容のスピーチであった。学生は当時の気持ちを思い出したのか、突然壇上で泣き出した。しばらくの間涙が止まらないほどであった。聞いていた学生たちは彼女の話に聞き入っていた。話し終えた学生はすっきりした様子で笑顔で席へ戻っていった。この学生の話からスピーチの内容の流れが変わっていった。心に残っている言葉や人物を思い出すことはその時の感情連れてくる作用が強かったのであろうか。壇上でスピーチをする学生たちの口から次々と自分の辛い経験が時には涙を交えながら語られた。「小・中学校時代にうけたいじめ」、「部活動でなじめなかったこと」、「家族と上手くいかないこと」、「目指す道を諦めざるを得なかった話」の中で、その時に出会い救われた言葉や友人、恩師について赤裸々に語られた。そのようなつらい話しを要求する意図は全くなかったが、真剣な言葉が教室に響いた。話し手は真摯に自分と聞き手に向き合い、聞き手も話し手の話しを真面目に受け止めていた。

告白めいた話であったが、学生たちは辛かった時期を救ってくれた言葉や人物に感謝をして話を終えていた。つらい経験ではあったが自分の中では整理がつきはじめているのだろう。乗り越えた過去の出来事として自分を見つめ直す姿があった。「話す」という行為は「放す・離す」に通じる。大勢の聞き手に向かい自分の言葉で語る事ができたことで、辛かった経験から放たれたと考える。

先に、この播鉢状の小ホールのような教室は、人と人との距離が遠く、アナウンスの授業には適さないと述べたが、互いの距離が遠く声が拡散してしまうことが、学生たちにとっては深い話ができる環境だったのかもしれない。学生たちの告白スピーチの連鎖は、場と教室の何かに反応した結果であったのだろう。2017 年前期以降の授業では、同じようなスピーチの課題に対してこのような告白スピーチの連鎖は起こっていない。実に不思議な光景であった。話すということの根元的な力を見せつけられた時間であった。同時に、スピーチのテーマは捉え方によっては予期せぬ方向へ誘うこともあり得るという点を教えられた。

4-4 韓国からの留学生と共に

2017 年度後期の「アナウンス入門」は特徴のある授業であった。履修者 7 名の内の 3 名が韓国からの留学生だった⁷。彼女たちは日本の学生より年齢も高く落ち着いていた。日本語も高いレベルにあったので特別視はせず、日本人の学生たちと同じ通常の

内容を用意した。留学生たちは、特に日本語の発音やイントネーションを学びたいと語っていた。3名とも声が小さくうつぶし加減で話をするため、始めのうちは声が聴き取れないことも多かったが、徐々に少しずつではあるが、話す声が力強くなっていった。

総じて、留学生たちは「日本語の濁音の発音がでない」、「下を向いて話すので声が解放されない」という傾向があったが、文章の読みもスピーチも真剣に取り組んでいた。その姿勢は、日本の学生に良い刺激になったはずである。前期の授業と履修人数が異なるため、スピーチは1週おきに順番が回ってきた。スピーチ課題も「互いの国や地域への印象や文化紹介」、「若者の考え方や流行情報」、「女子ということについて」などを課した。中でも、徴兵へ送り出す男性を見送る女性の切ない胸中をとりあげ、韓国社会での女性らしさ、男性らしさについて語った留学生のスピーチは秀逸であった。スピーチそのものは前期と比較して自己省察のような内容にはならなかったが、互いの発表を聞き合うことで発表力は向上していった。

しかし、少人数であったことを授業で生かしきれず、学生たちは個々に話をするのもあまりなく会話も弾まなかったことが悔やまれる。なぜ、もう少し互いの交流が進まなかったのか。その原因を考察すると以下の3点に気づいた。①机の配置の問題：机は3人掛けの名が机をコの字型で3人、2人、2人で座るようにさせたが、留学生3人を固まらないようにすべきだった。②リラックス効果：呼吸や発声・滑舌練習の前にアイズブレーキングとしてボイストレーニングで行うストレッチを導入して互いにリラックスさせることも必要であった。③授業の進め方：授業を進める上で留学生からも話を引き出していたつもりであったが、やはり留学生には進め方が早かったかもしれない。ついていくのが精いっぱい余裕がなかったと思われる。

後期は様々な文章を例文として読みながらも、以下に挙げる一つの文章をしっかりと読めるように繰り返し読み進めていった。

【説明文】

徳川家康が幕府を開いて百年も経たぬうち、日本各地から押し寄せた人々で江戸は百万人の大都市になりました。当時ヨーロッパ最大の都市といわれたロンドンを上回り、世界最大級の都市となったのです。この最大級の都市である江戸が、外国を攻めず、侵略もされず、徳川期の平和は二百六十年以上も長きにわたって繁栄しました。このことは世界史上でも例がないことです。

家康が城に入ったとき、まだ江戸は荒れ果てていたといいます。壮大な都市づくり計画の構想は三年がかりで練られ、百万人の水や米の確保はもとより、首都建設の一大事業の基盤となるライフラインを整備しました。そしてさまざまな交渉のため、機転の利く商人を、商業の都大坂から一千人を選抜して引き連れてきたといいます。

(越川禮子「江戸しぐさ」より)

越川禮子著「江戸しぐさ」の一節を少しずつ読みながら、文章の骨格を確認し、アクセント、イントネーション、プロミネンス、ポーズ（間）、鼻濁音等について解説を行った。最終的には、上記の文章と絵本を1冊読み通し、これまで学んだ事のまとめと各自の感想を発表することで評価を付けた。

絵本は「笠じぞう」（民話）、「手袋を買いに」（新美南吉）、「モチモチの木」（斎藤隆介）、「椋鳥の夢」（浜田廣介）の中から1冊を選ぶようにした。本来、教師が（朗読家）が範読のような形で読むことは推奨されないのだが、今回は留学生に配慮して日本語の響きを味わうことも重要であると考え、特別にすべての作品の朗読を行い解説の時間も設けた。あくまで特別な例である。

留学生は、2人が「椋鳥の夢」、1人が「手袋を買いに」を選んだ。日本の学生は「笠じぞう」1人、「手袋を買いに」1人、「椋鳥の夢」2人であった。「モチモチの木」は、ストーリーは面白いが、老人語や方言のような言い方が多用されているため、留学生は教科書にない聞き慣れない言葉ばかりで発音ができないと敬遠し、日本の学生もおじいさんと子供のセリフが難しいということで誰も選ばなかった。表現力を鍛えるのはとても良いテキストであるため残念であった。

本を1冊声だして読み通し聞かせることは思う以上に難しい行為である。ましてや3人の留学生にとっては外国語である。しかし3人は見事に読み通した。「椋鳥の夢」は短いがイメージを捉えるためには読みこなさなければならない。何回も読み練習を積んだ成果が表れていた。サ行の「白い」「すすき」等の単語やハ行の「さきほど」「そのひも」という言葉が出にくかったが会話の部分はよく表現できていた。留学生の二人とも、ラストのシーンで、いなくなってしまったお母さんを想い子供の鳥が、「ああ、お母さん」とつぶやくその表現は素晴らしかった。また、枯れ葉がこすれあう「カソコソ、カソコソ」の表現は、クラスの全員が感動するほど見事な出来栄であった。オノマトペに興味を持っていたようである。

以下は、「椋鳥の夢」についての学生たちの相互評価の一例である。

<良かったところ>

- ・練習の成果がみられた。
- ・スピードが安定していた。
- ・全体にゆっくりと読めて聞きやすかった。
- ・「カソコソ、カサコソ」の音が工夫されていた。
- ・むくどりの子の言い方が可愛らしく、お父さん鳥のセリフも複雑な感情が伝わってきてとても良かった。
- ・言語が違うのにここまで長い文章をスラスラ読めるのはすごいことだと思う。

<改善点>

- ・感情がもう少し欲しかった。

- ・緩急をつけてみると良かった
- ・もう少し、声が大きいとよかった。
- ・後半、スピードが早くなった。
- ・テキストは机に置くより、上げた方がよいと思った。

「手袋を買いに」の朗読は所要時間が12～13分の作品であり、これを一人で読み通すことになる。この作品を選んだもう一人の留学生も、授業の始めのうちは聞き取れないほど小さな声であったが、最後の発表では声が出てきていた。地の文と台詞の差別化を意識して一語一語丁寧に発音し好感が持てる読みであり、練習の成果は如実に表れることをみせてくれた発表であった。作品自体に愛着が感じられたのか、韓国で翻訳して皆に読んで聞かせてあげたいという感想を聞いた時は嬉しさを禁じ得なかった。

以下は、授業最終回の日本人と留学生のリアクションペーパーに書かれた感想である。

★質問・意見・感想

この授業は、人数が少なく、先生に直接学ぶ時間も多くて、すごく良かったです。
 Part 1-4で、リラックスして後けることが出来ました。半分韓国からの留学生で、いい経験になりました。
 この授業のおかげで、日本語への関心もさらに深まりました。人前で話すことにも慣れました!!
 とても良かったです! ありがとうございました!

★質問・意見・感想

韓国ではこんなじやまを受けることがなかったです。
 それで日本で受けながら話をする方法はもちろん、日本語の勉強もなりました。
 (ほんとうに)良かったです!! ありがとうございます!

(文字が薄いので、以下書きだしを記載する)

「この授業は、人数が少なく、先生に直接学ぶ時間も多くて、すごくよかったです。アットホームで、リラックスして受けることができました。半分韓国からの留学生で、いい経験になりました。

この授業のおかげで、日本語への関心もさらに深まった。人前で話すことにも慣れた!! とてもたのしかった!ありがとうございます!」

「韓国では こんなじゅぎょう を受けることが なかったです。それで 日本で 受けながら 話をする方法はもちろん 日本語の 勉強も になりました。

ほんとうに よかったと 思います!! ありがとうございます!」(原文のまま)

5 授業の課題

本稿では主に 2017 年度の授業について触れてきたが、2018 年度前後期もそれぞれ教室には緊張感が漂っていた。話し言葉の授業はやはり声という身体と身体の直接のやり取りの場なのである。

授業の課題としては 3 点を挙げる。①集中の持続②テキストの扱い③スピーチの課題の精査である。

① 集中の持続

自分がどのような声でどのような言葉を使い、どのような話し方をしているのかを意識するには、読みや話しを録音して聞くことが一番効果的である。音声言語表現技術についてアクセントやポーズ等の指摘を受けたその後、どれだけその指摘を反映できるかを確認するためにも録音して聞くことが有効である。しかし、最大 30 名の入門の授業において全員の声を録音してチェックすることはかなわない。したがってリプレイなしでその場で指摘をすることになる。学生たちも一回きりの読みや話を聴き取らなくてはならない。視覚優位の世界に生きている現代人にとって、聴覚を研ぎ澄まし集中を保つことは初めの内はなかなか難しく続かない。「眠くなる」、「姿勢を保つことができない」「疲れる」という学生の感想がその点を語っている。

集中の持続が大きな課題である。そのため、全員で声を出す時間と聞く時間、発表する時間を組み合わせ、時には椅子から立ち上がり、発声・滑舌練習を行い、ストレッチなどと合わせて身体そのものを動かす。その日スピーチを行わない学生の集中が途切れないよう、1日に最低1回は発言なり、滑舌練習の範読を課すことにしている。それでもまだ何か工夫ができるはずだ。時によってはこちらからの指名を待たず、自由に発言が行われる時があるが、これが理想である。教室全体の緊張感は大切であるが、縛られない個々の自由な発言ができるような空気を作り出すことを目指したい。

② テキストの扱い

2017 年度の後期授業は、一つの文章を例にして音声言語表現技術を解説しながら、その文章を的確に読むスタイルをとったが、それ以外の授業では、毎回様々な文章を提示してその時のテーマを反映できるような読みを 1 回完結で用意してきた。したがって、最後の発表形式のテストにおいても、扱う文章は異なる。2018 年度前後期では、「授業で扱った文章の中から 1 つ選びそれを読む。次に『私の一作』というテーマで好きな本をおすすめ本として紹介し、その中の一節を 1 分以上朗読する」という課題を出し、発表時間は 5 分以内とした。前後期共にニュースと CM 告知文は、どちらも 1~2 人しか選ばず敬遠された。一方、人気があったのは前期は天気予報と演説の一節「私には夢がある」であり、後期は、詩「朝のリレー」に人気が集まり、ほとんどと言っていいほどの学生が詩を選んだ。

テキストスタイルで取り上げる以外に、滑舌練習を兼ねて「坊ちゃん」や「杜子春」「怪人二十面相」の冒頭部分を読ませ、文学案内や作品や作家にまつわるトピックの紹介も行いマンネリ化を脱するよう試みた。「自分の感受性くらい」の作者である茨木のり子を扱った際には反応がよかった。女子大であることで、やはり女性作家の生き方には興味を示す傾向があるが、いわゆる明治、大正、昭和の名作には反応が弱い。例文も含めて文学性の高いテキストを読むのは演習以降の授業にして、入門では関心度の高い作家やテキストを取り上げた方が取り組みやすいと考える。

③ スピーチ課題の精査

スピーチについては、2017 年度前期の教室の様子として詳述したが課題テーマについては解釈やとらえ方もスピーチそのものに反映されるため、敢えて何をどのように話すのかに関してはなにも規定しない。2 分以上 3 分以内と時間の指定をするのみである。話されたスピーチについて、聞き手は内容の構成やパフォーマンスという視点で気になった点を指摘していく。学生にとっても今話された具体の文脈の中での指摘の方がわかりやすいからだ。

スピーチのテーマとしては、「自己紹介」、「言葉について思うこと」と共に「気になる最近のニュース」を挙げている。このテーマについて話すには、新聞やテレビなどメディアに接しなければならない。したがって否が応でもニュースを探すことに迫られる。教室には、日常、全くニュースに関心が無く新聞も読んだことがないという学生が数人いる。彼女たちにとってはこのテーマは苦痛である。何をどのように選び話せばよいのかわからないからだ。苦肉の策として、ネットニュースやツイッターから探し出してきた。ネットニュースは偏りがありソースとしての信頼性は新聞やテレビのニュースと比較して脆弱であるが、まだ許容範囲である。しかし、ツイッターから拾うという手軽さについては認められなかったが、ツイッターからの検索は除外すると指示をしなかったためその回は許容した。世の中の出来事から自分は独立しているとの思い込みを少しで

もこの時点で払拭させていかなければ人生を生きる上で損失を被ることや、就職活動と同時に取り組んでも頭に入らないことが懸念される。しかし、なぜ、時事問題に苦手意識があり興味を持たないかについて、本質的な議論が必要なのもかもしれない。

それでも、大半の学生は時事問題を自分の問題として捉え、見事なスピーチへ導いた学生もみられた。女子大であることも関係するのか、やはり女性に関するニュースが多く挙げられた。中でも、「妊婦加算」のニュースについて述べた学生がいたが、このニュースは実にタイムリーで、多くの学生が高い関心を示し意見を述べた。その後、「妊婦加算」は見直しから凍結へと進み、学生たちにリアルタイムでニュースの行方を伝えることができた。このニュースに触発されたのか、虐待や妊婦への暴力事件など、女性に関するニュースが多く語られ共有された。学生という同じ立場から語られたニュースの視点は刺激を与えあうのに充分であった。上手くスピーチができなかった学生は、次回は自分も皆に評価されたいという心理が働き、互に力を蓄えていく流れができていった。

スピーチについて意見や感想や質問を聞いていくが、漫然と話を聞き流すのではなく、聞くポイントを押さえながら耳を傾けるよう指示をしている。質問に関しては必ず1つは準備するようにし、感想についても「良かった」、「わかった」という内容のないものは感想にならないと伝え、何がどうだったからよかったというように具体性を持たせるよう指示することに努めた。また、スピーチの際にはタイトルを付け、キーワードを設けるようにした。初めの内は手間がかかるような感想があったが、タイトルはとても重要なもので、キーワードを示すことで自分も内容の整理ができるようになったと気付いた学生も多かった。

繰り返しになるが、「アナウンス入門」は「話し言葉の基礎を扱う授業」である。しかし内容的には工夫次第でいろいろな装いが可能な授業である。換言すれば、柔軟性のあるアクティブラーニングとして教室全体で作りに上げていく授業なのである。

おわりに

書き言葉に作法があるように、人前で話す話し言葉にも作法がある。しかし、遺伝子レベルで能力として組み込まれておらず学習を必要とする「書く」という行為と比べて「話す」という行為については、母語での発話行為は当たり前の行為であるため話し言葉について見直す機会は等閑にされている。大学までの学校教育での授業において話し言葉教育はほとんど行われていない現状の中、大学で自らの話し方や話し方の癖などに気づき、それを客観的に見つめ直すことはアイデンティティーを確認する契機にもなる。2017年度前期のスピーチが自分のこれまでを棚卸して自分の言葉で素直に語られたように、今までと今、そしてこれからを考える機会になるのだ。これは、やがて訪れる就職活動への足掛かりにもなり得る。もっとも、スピーチだけが重要なことではない。自分の声を意識し話し方を客観視することから、「なぜ、このような話し方が身についた

のか」、「自分の思いや感情や言いたいことは人に伝わっているのだろうか」という問いも浮かび上がってくる。語彙の足りなさを痛感する学生も多い。コミュニケーションの在り方を考える学生もいる。

アナウンス系の授業は、演習や実習の中で反復しながら深化させ身体化していくことを目指す。その先には、アナウンサーや声優といった声の仕事が見えている。しかし、入門においては、話すため、伝えるために必要な最低限の作法を整理して提示している。学生たちがこれまで母語で伝えるために、なんとなくやってきたことをロジカルに考えられるよう見つめ直している。母語である日本語をおしゃべりのレベルではなく的確に伝えるための話し方を身につけることを目標としている。これらは社会人として必要な能力のはずである。「アナウンス入門」の授業は、声の仕事につくことを目指す学生のためだけの授業ではない。時と場所と状況に合わせた話し方ができるよう、伝えたい情報を正確に読み伝えるためには音声言語表現技術を理解して使うことができるようになることを意図している「母語による話し言葉の授業」である。

(注)

- ¹ 大学・短期大学・専門学校進学情報サイト。 <https://studysapuri.jp/>
- ² 体調が良くない時や喉の調子が悪い場合は声を出さないよう指示する。声帯は傷つきやすい気管であることから、特に喉が痛い際は注意を促している。
- ³ どの教室でも初回の自己紹介で言葉が見つからず涙を流す学生がいるが、このような学生たちは授業に積極的に参加する。悔しかった思いを跳ね返すように準備を整えてスピーチに臨む。最終のテストでは、見違えるような発表を行うのが常である。
- ⁴ 「ニューギニア」のアクセントは平板であるが「パプアニューギニア」の第一アクセントは「ギ」で下がる。平板アクセントも許容されるが、テレビのニュースでは、第一アクセントで読まれていた。
- ⁵ 授業中に学生が頻繁に前にでてくるため、通路側でなく奥に入ると移動に時間をとられてしまうことから、通路側に座らせた。
- ⁶ 本人から、「吃音に対するコンプレックスがありなんとかしたい。」という相談が初回の授業終了時にあった。日本語日本文化学科所属ではない2年生で、友人3人と共に履修したという。普通に話している際に吃音はほとんど出ないが、人前に立つと吃音になるためスピーチが心配だという。しかし、初めの一声や文頭においては吃音がみられたものの、重度の吃音ではなかった。文章の読みでは問題はない。本人は、自分の名前が発音しづらく、(確かにサ行の連続にタ行ナ行が続き難しいかもしれない)そこで詰まっしまい言葉が出ないと明かしてくれた。名前をいわなくて良いという簡単な指示をだしただけであったが、すんなりとスピーチができた。この経験が嬉しかったのか、スピーチの際に笑顔ものぞくようになった。周囲の友人のサポートも素晴らしく、15回を通して4人のレベルは著しく上がっていった。本人は、名前を言う際の吃音には未だ敏感だが、人前で話すことに恐怖は感じなくなり慣れてきたと語っ

ていた。ゆっくりと一語一語丁寧に発音すれば問題はないことを繰り返し伝えたことが届いたと捉えたい。

⁷ 3名の留学生は、欠席も少なく授業態度も非常に良く、積極的に授業に参加していた。